

〔貞順故實聞書條々三〕一御酒のかんは、九月九日を明年の三月二日迄たるべし、上巳より寒酒也、桃花を酒に入候て用る也、又九月九日には菊花を酒に入る也、燐したる酒をかんの御酒と申候、ひやざけをかんゑゆと申候也、

〔延喜式造酒四十〕新嘗會直相日雜器

瓮四口、盛參議已上白貴酒、并燐酒器炭一斛、受直買用、○中略

供奉料中宮亦同

凡略○申 煖御酒料炭日一斗、申内侍司受主殿寮

〔西宮記臨時四〕侍從所

異角庇地火爐此有孟酌之時、於溫酒云々

〔江家次第一正月〕供御藥正月元二三

主殿寮設火爐暖御酒或用銀鑄子

〔平家物語六〕紅葉の事

此君衛近は、いまだよう主の御時より、せいをにうわにうけさせおはします、去ぬるせうあんのころほひは、御とし十さいばかりにもやならせおはしましけん、あまりにこうえうをあひせさせ給ひて、北のちんに小山をつかせ、はぢかいでの、誠に色をうつくしうもみぢたるをうゑさせ、もみぢの山となづけて、ひねもすにゑいらん有に、猶あきたらせ給はず、然るを有夜、野わきはしたなうふきて、こうえう皆ふきちらし、らくえうすこぶるらうせき也、殿もりのとの宮づこ、あさきよめすとて、是をことぐくはきすて、けりのこれるえだちれる木のはをばかぎあつめて、風すさまじかりけるあしたなれば、ぬいどののちんにて、さけあた、めてたべける、たきゞにこそしてけれ○中略主上いと、しく、夜るのおと、を出させもあへず、かしこへ行かう成てもみ